

奪われた青春時代

萩谷 初江 さん(93)



現在、茨城町鳥羽田に在住。萩谷さんが神奈川県立高等女学校在学中に、戦争は始まりました。

横浜大空襲

昭和20年5月29日、横浜は大空襲を受けました。

「学校で定期試験の勉強をしていると、けたたましくサイレンが鳴りました。空襲警報です。窓からは煙が入ってきました。裏山に逃げるために外に出ると、息が苦しいほどの熱風。下町はすでに火の海でした。皆で裏山に逃げた途端、学校が燃えましました。」

焼け野原と化した街は地獄絵図です。身内の死体をトタン板の上で火葬している人、炭のようになつた死体、防空壕の中に吹き飛ばされ重なっている死体の山。落ちていた鉄かぶとを拾おうとしたら、首がついていました。

それらを見ても、怖くもないし、驚きもしない。人を焼く臭さを感じませんでした。今思うと、当時の心境が信じられません。

道は無くなっており、なんとなくの方向に歩いて家に帰りました。道は焼けており、熱で靴の底が抜けました。途中、山道に時限爆弾が落ちていましたが、『いつか戦争で死ぬんだから。』と、爆弾を跨いで進みました。」

勤労働員

その後、萩谷さんは田奈部隊※へ勤労働員となりました。

「仕事は高射砲の玉の製造です。高射砲の筒にスパゲティを黒く染めたような火薬を詰め、絹糸で上下を結びます。火薬のせいか顔が腫れましたが、それでも続けました。

作った高射砲は、肩に担いで、格納庫へ運びました。」

「お国のために、天皇陛下のために。」という言葉を通じて、空腹の状態でも働き続けたと語ります。

※田奈部隊：現在の神奈川県横浜市青葉区で活動していた旧陸軍部隊。

敗戦

「軍国主義の教育を受けて育った私は、『土壇場には神風が吹いて、どんな戦争にでも勝つ。』と思っていたので、戦争に負けたと聞いたときは、きょとんとするばかりでした。何のためにあんなに頑張ったのか。家族や家を失った子どもたちは、これからどうするのだろうか。

戦争が終わった安堵と不安が入り乱れ、夜も眠れませんでした。」

戦争が終わり、萩谷さんは家族の疎開先である、母の故郷・茨城町鳥羽田に帰りました。

「電車はいつ来るのか分からない状態で、空腹でふらふらになりました

現在、茨城町上石崎に在住。当時は谷田部に住んでいました。終戦時は、小学6年生でした。

食べ物がなかったが一番辛かった

戦時中は、食べ物がなかったが一番辛かったと語ります。

「私の家は農家で、米を作っていました。しかし、供出制度により、作った米は強制的に政府に買い上げられてしまうため、家族が食べる分はわずかでした。

米が足りないのです、ご飯には、さつまいもやじゃがいも、とうもろこしを入れてかさ増しをしていました。

母は、自分たちが食べる分を確保するために、物置の2階に米を隠していました。米袋を抱え、はしごを登っていく母の姿を見て、大変だなと思っていました。」

当時は、どこも食糧不足で、学校の運動場や堤防は、大豆などを栽培するための畑として使われていたそうです。

大きい貧富の差

当時は、貧富の差が大きかったと言います。

「うちは貧しく、長靴を買ってもらえませんでした。雪が降ったときは、下駄で外に出て遊びました

が、すぐに鼻緒が切れてしまうのです。雨の日は、裸足で学校に行ったこともあります。」

親から学校を休むよう言われ、家の手伝いをするのも多かったそうです。

「学校を休むのは嫌でした。夜は電気が通っておらず暗かったため、宿題もできませんでした。

お金を稼ぐために、家の鶏が産んだ卵を卵買いの人に売りに行ったり、養蚕業もしていたので、蚕の餌である桑の葉を摘んだりしました。」

空襲と隣り合わせだった毎日

生活は常に空襲を警戒しての毎日でした。

「家でも学校でも、常に防空頭巾を身に着けて過ごしていました。

友達と遊ぶときは、空襲警報が鳴った場合にすぐに避難できるように、小さい弟妹を背におぶった状態で遊んでいました。」

飯田さんは、水戸空襲※を見ていました。

「水戸の方面が炎で真っ赤になりました。その赤い空をB-29が2、3機飛んでいくのです。まるで悪い夢を見ているかのようでした。

戦争はもうしたくない。決してやらないでください。」

※水戸空襲：昭和20年8月1日未明に起きた大規模空襲。

茨城町戦没者追悼式

先の大戦において尊い犠牲となられた町関係戦没者の御霊に対し、追悼の意を捧げると共に、町をあげて平和を祈念し、町発展の決意を新たにするため、追悼式を実施します。

- ▶日 時 9月21日(日) 午前10時
(午前9時15分～受付)
- ▶場 所 「やすらぎの丘」慰霊塔前(茨城町小堤967番地)
※雨天の場合は、旧駒場小学校体育館
- ▶その他 役場駐車場をご利用ください。

【問合せ先】 社会福祉課 ☎029-240-7112 (直通)



萩谷さんのこれまでの人生を綴った小冊子「私の歩んできた道」。戦時中や戦後について、詳しい記載がある。

がら、やつのことで家にたどり着きました。母と叔母が出迎えてくれ、抱き合って泣きました。戦後の暮らしも大変で、食べるものが少なく、父の衣服をお米や野菜などの食糧に替えました。また、疎開してきたことを子どもたちに馬鹿にされ、嫌がらせもたくさん受けました。」

戦争がなかったら..

「あの戦争がなかったら今の私はどうなっていたのだろうか。戦争によって、人生の楽しい時である青春が奪われました。素敵な男性がいても、みんな兵隊になるので、声をかけられず、小さい声で『いつてらっしゃい』しか言えませんでした。その方たちもみんな戦死してしまいました。

戦争は残酷であり、よく分からないまま巻き込まれる子どもが一番かわいそうだと思います。絶対に戦争はしてはいけません。これからの時代を生きる人にあんな思いはさせたくありません。」

戦争と生活

飯田 喜久江 さん(91)

